

しのきのばんむしかめのどうさいかくのさいひやうさいとさいりやうめんかすめうけたる
さりとほしかなはめばんぎ五六がへしの一二のさいや四三のさいや

〔催馬樂入文中〕一篇の總意は樗蒲などの大せりの博奕こそ國の大禁なれ雙六などの小籠は
あながち害にもならねばその事の忘れがたくてつらく其具を打守るに梅檀珊瑚柞の木
の盤牟些喰の筒犀角のさい平賽投賽とかぞへゆくに両面かすめ浮たるうき紋の盤の如く
うすくわれらも名ざしにあづかれどこは切通しの盤の如く上下一同の事なればいかに
せんこれや此かなはめ盤の鉗をはめられぬともすべもなしだ五六がへしの一二のさい
よ四三のさいよと投うちて心をやりをると云なり

〔東大寺獻物帳〕雙六頭一百一十六具一隻未造了二具納小皮箱

〔東大寺續要錄〕寶藏勅封藏開檢目錄 北藏略中 木地厨子一脚 納略中 雙六賽一宮略中

建久四年八月廿五日

〔枕草子七〕つれなる物 むまおりぬすぐろく

〔枕草子春曙抄七〕馬は簀の事也晋書袁彥道が傳に投馬絶叫とあり是博局にむかひての事也
むまおりぬは雙六に思ふ目のおりぬなり

〔百練抄四〕長保五年八月二日雙六采入第二内親王子鼻内僧慶圓加持之出之給度者

〔安齋隨筆後編五〕一雙六ノ采 貞丈按第二親王は一條院第二ノ皇女媛子内親王也長保二年
十二月十五日降誕長保五年には齡四歳也雙六ノ采生長の人鼻の穴にも入るべからず況や
四歳の皇女の鼻の穴に入べからず前陰の中に入たるを女房隠秘して鼻内に入ると云たる
なるべし加持の驗は有べからず女房ほり出したるなるべし

〔平家物語〕ぐわんだての事